

最澄が延暦年中（782－806）に建てたとされる。延暦寺の名は延暦の年号に由来している。
このような栄誉に浴した寺院は日本全国に4箇所しか存在しない。

本尊は聖観音と千手観音。そのため「千手堂」の別名を持っている。

14歳で最澄の高弟義真に師事した円珍（えんちん 814－891）は、円仁が唐から帰国した五年後の仁寿三年（853）に唐に渡り、天台教学のほか最新の密教を学んで天安二年（858）に39歳で帰朝。天台座主在任中（868－891）に、この山王院堂を住坊とした。

かつてはここに円珍が唐から請来した經典章疏類を収蔵していた。これは山王蔵と呼ばれ、最澄が比叡山に天台仏教の寺院を創建した際にもたらした根本経蔵、円仁の真言蔵のあわせて、初期叡山の三大経蔵の一つとしても知られていた。円珍は円仁の後に唐に渡ったので、円仁の前唐院に対して、後唐院とも呼ばれた。

円珍没後は円珍の遺骨を納めた真像が安置され、廟所的な性格も併せ持った。円珍滅後百年、円珍派と円仁派の学僧の間に比叡山の主導権をめぐる争いがおこり、円珍派は円珍の真像を背負い、比叡山のふもとの大津の三井寺へと移っていった。

山王院堂に祀られていた千手観音像は延暦寺に残され、重文に指定されている。